



106号  
2005/9/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://users.hoops.ne.jp/wanli-jp/>

Eメール:[wanli@m2.ocv.ne.jp](mailto:wanli@m2.ocv.ne.jp)

ホームページは毎月5日頃までに更新を務めています。



「弟の子守り」 畠 博之

ネパールの西部山間部の私の派遣先で撮影したものです。姉弟はネワールという民族の貧しい家庭の子どもたちで、お父さんは大工や石工の仕事をしてながら転々としていました。お母さんは私のいた学校の近くの道端で小物を売って商売をしていました。学校が終わった後の夕方、他の子どもたちが草刈りをしに出かけたのと一緒に外に出てきて、私の事務所までやってきました。弟は民族服のお古を着ていますが、お姉さんは男物の下着のお古を着ています。畠博之:1987年～1998年にわたりネパールの山村において教育協力活動に従事、帰国後ネパール関係のNGOで活動を続ける。

<http://www.page.sannet.ne.jp/t-hata/roki/himalchu.html> (‘わんりい’HPにリンクしています)

【ご参加ください!】映像とお話で知るアフリカの問題

■あなたの知らないアフリカの事実  
—その過去・現在・未来から考える■

2005年9月18日(日) 13:30～15:30

於:まちだ中央公民館・視聴覚室 参加:無料

JR横浜線ルミネ側改札口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分  
町田東急デパート裏109ファッションビル6F

お話:ガスパレイ・ミグィ・キルスさん(ケニア出身)  
竹田悦子さん

\*お二人は2年前アフリカで結婚され、共に帰国後、お二人でアフリカに対する偏見や無知を超えて相互理解の足がかりとして「アフリカンコネクション」を設立、アフリカの紹介活動を続けている。

お二人は語ります。「最近、アフリカの貧困に真剣に取り組もうとする世界の動きがあります。そもそもどうしてアフリカが発展しないのでしょうか?日本を含めた先進国はアフリカの発展にどのように関わっているのでしょうか?などなどのさまざまな問題点を、映像を交えて分かりやすくお話ししたい。」今年6月、‘わんりい’料理講座の講師をガスパレイさんをお願いした際、アフリカの問題をもっと身近に感じ

てもらふ機会が欲しいとの気持ちを明かされ、今回のお話の会が実現します。この機会に是非、アフリカの問題をご一緒に考えて見られればと思います。

(関連記事:‘わんりい’106号8pアフリカとの出会い)

‘わんりい’106号の主な目次

中国紹介②<中国民俗—改革解放後の変化2> .....	2
何嬢嬢来信⑦「中秋節の思い出」 .....	4
北京からこんにちわ!② .....	4
「太郎の子ども図書館」作りたいⅢ .....	6
中国を読む(番外)【ラオス 素敵な笑顔】 .....	7
アフリカとの出会いⅢ .....	8
活動報告「ベトナム料理交流会」 .....	9
松本杏花さんの俳句 .....	9
四姑娘山・花の山旅(写真集) .....	10
ピースポート105日間の旅Ⅵ .....	12
‘わんりい’掲示板 .....	13

# 【中国紹介 《22》】 〈中国民俗—改革解放後の変化2〉

轡田 美弥子

## ◆書籍類

**旧**：紙はざらざら、ごわごわ。色はページっぽくくすんでいる。あるときには再生紙っぽい黒い塊が邪魔で印刷が見えないこともある。乱丁落丁も多く、よく見ないで買うとあとでひどい目にあう。一部が逆さま、くっついている頁あり、折れたまま断裁しているなど、多いとはいわないがたまにある。本屋の本は大体ほころかすすをかぶっていることも多く、きれいなものを探すのに苦労する。内容的にはほしくて、拭いてもとれない汚れがどうしても気になり買うのをやめたことも多い。以前の国营商店では、客が品物を自由に手にとって見ることができない(店員を呼んで取ってきていただく)のが普通だったが、本屋だけは自由に見られることが多かった。不良本はもちろんだが、汚いのも我慢できないのでとにかくチェックはするようにしていた。以前は文庫本より少し大きいサイズが主流だった。持ち歩きには便利で、待たされ時間の長くて多い当時には暇つぶしには最適の道具だった。どんなジャンルでも安く、良い社会主義か？ 発行部数による値段の差を感じないものが多かった。

それにしても、装丁に写真もなくあまり購買意欲がわかない表紙デザインで、ぺらぺらめくると漢字ばかりでは、中国語勉強中とはいえ買って読んでみようというまでにはいかない。毎度本屋には行くが、買って使おうとなるとジャンルは限られる。子供用の語学参考書である。漢字の読み方をピンイン表記(アルファベット+声調つき)してあれば、わたしも読める。絵もあるし、とっつきやすい。中国人の友人がくれた語学問題集を契機に、書籍内容向上まではずっと参考書ばかり見て、辞書や問題集を買っていた。

**新**：ここ何年かで、本のジャンルが激増、経済的ゆとりができた層向けカラー写真をふんだんに使った豪華装丁本が目につく。ごわごわや不良本は少なくなったがゼロとはいえない。店頭で自由に見られる新刊が多いし発行部数も増えているので、装丁や中身をよく見てから買うことができる。料理、建築、旅行といったゆとりを楽しむ書籍が増えている。コンピューター関係も多い。コンピューター関係についていえば、日本人が普段かたかなでそのまま使っている英語が、中国語でどう表記されているかを見るのも楽しい。日本語ではかたかなになっているだけで、実は意味がよくわからないコンピューター用語が多いので、漢字を見るとなるほどと思うこともある。

困ることといえば、値段がかなり高くなっていること、在庫を調べるのは無理に近いこと、装丁が立派すぎて日本に持って帰るのが重過ぎること、それからほしいものが多すぎて選ぶのに苦労すること(笑)である。特に旅行関係がすばらしい。装丁が非常にこっているし、内容もかゆいところに手が届くように懇切丁寧、しかも図や写真が豊富で、見ているだけでも楽しい。日本のガイドブックにも限度があるが現地で購入すれば普通日本人が行かないような珍しい観光地を探すこともできる。中国人の探究心はすごいものだ。これまで生活の一部だったものが、あるとき観光場所に一変する。すると人々はそれに合わせ、観光地化が更に進む。広い国土をもつことから、一生かかっても行ききれないのは当然だ。

はじめて中国に行ったとき、何か本を買いたいと思ったが紙質が悪いのと文字ばかりで写真など期待できず買うとしたら子供向けの絵本くらいしかなかったことを思い出す。

今では中国語ができなくても、写真を楽しむだけの書籍ならいくらでもあり、空港で時間つぶしに見ているだけでも楽しくなった。中国語が多少でもできれば、更に見どころが増える。日本で買うと高いし品数も限られるので最近では本屋を見かけると、ところ構わず入りたくなる。

## ◆紙(衛生紙)

**旧**：旅行者にとって、トイレトペーパーはとても貴重だ。慣れない土地で体調不良にもなる。そんなときにごわごわで固い紙では余計調子が悪くなりそうだ。以前中国のホテルでは、トイレトペーパーは快適とはいえなかった。巻が小さいのですぐなくなるし、紙は厚いが固くて吸収性もいまいち。安めのホテルではお決まりのように、濃いピンク色で、金魚マークが目印のトイレトペーパーがお



貴州省東南部三都の市街地。普通の中級都市で、少数民族の衣装(水族)を着て普通に歩いているところが特徴的。こういったところのレストランは個室の場合部屋ごとに水洗トイレと紙がついている場合も多い。シャワーが付設されている場合は極端に広くて、面食らったりする。

いてある。こういうときは日本のうすくてやわらかいティッシュが懐かしくなったりする。外に行くと、トイレに紙がないので長期の場合は日本から巻を持参することにした。夜中に紙がなくなっても、ホテルの人(スタッフ)を呼ぶのも何だし、いないかもしれないと思うと心配になる。

**新:** 最近の質の向上は目ざましい。ピンクの固い紙はほとんど見かけなくなり、スーパーでは日本と同様の白くてきれいなロールが山積みされている。消費についても大都市は日本と同様だ。ホルダーはないところもあるが、洋式の場合はタンクの上ののっていることもある。香水つきもあるし、とにかく白く柔らかくなっている。空港などでは温風乾燥機(つまり出入り口) 近くなどに巨大ロールがあり、入る前に必要量をとって個室に入る

こともある。日本人は慣れないので、ロールに気が付かず“中国では紙は自分で持参するものだ”と思って見逃すことも多いようだ。個室の中にある場合ももちろんあるが、盗難防止かもしれないために入口1箇所だけというのあまり気が利かない。でもないよりましで、トイレに入るとまずはこのロールの有無を確認するようにしている。中には、一番奥にあたりする。混雑していると取りに行ってから並ぶことになるのだろうか？

中国のトイレの下水管は、おそらく日本のものより太いかと思われる。昔から驚いたのが、生活廃水を彼らは自宅のトイレにがらがら流すことだった。なぜ流しに捨てないで、トイレに流すのか理解できなかった。中には日本に来ててもアパートでそうしている人がいて、心配になった。日



貴州省西部の苗(ミャオ)族の村、衣装から「青苗」と呼ばれる。観光地になっているので若者がパフォーマンスをしていたが、このトイレは、非水洗で壁はあるがドアなしだった。当然紙もなし。

本のアパートは台所の流しは中華系の油を全部排泄するほどよくはできていないようだが、何もトイレに捨てなくてもよいだろうと思った。なにせごみもはいつている。水分だけではない。いくら太かったとしても、中国人のように何でも捨てることさすがにつまる。中国の公衆トイレでは、自分の排泄物以外便器に入れないのが常識だ。公衆トイレでも普通は各便器にかごがついており、そこに紙などを捨てることになっている。これが日本人に慣れないから、初めての人はときどきうっかり便器に落とす。ここでつまることはあまりないかもしれないが、ちょっと危うくなった経験はある。元々つまっている場合もあるから、何が原因でそうなっているかは不明。ただ、一般の中国人は紙をかごにいれるので特別変なものを流さない限りは大丈夫だろう。昔のごわごわ紙なら大量に流すとつまるかもしれないが、最近は柔らかいものが増えたので、あまり心配はないかと思う。

最近、日本のスーパーで中国製のパルプ100%のトイレットペーパーが安くで売られていた。巻の高さが少し短いのだが、紙質は非常によい。再生紙でないので、触感も当然よい。でも環境問題を考えると、こんなものを買うのは申し訳ないと思ってしまった。

(写真は本文とは直接関係ありません)



福建省アモイの海岸道路。台湾領小金門島に面しており、数年前整備されて観光地になった。所々に公衆トイレが設置されている。入ったことはないが、ドアは当然ついていた。

中国には伝統的な祭りが、殆ど毎月あります。今月(旧暦8月)の祭りと言えば「中秋節」で、中国の人たちに最も大切にされている祭りの一つです。

中秋節は八月十五夜の満月の夜の祭りですが、私の頭に浮かぶ風景は、庭の丸いテーブルの上に線香を立てた香炉が置かれ、手作りの月餅、色々な果物を供えた景色です。しかし、この風景は私の幼い頃、私のお祖母さんの家の中秋節の風景で、今はほとんど見られなくなりました。

その頃は商品は今程豊富ではなく、お百姓の生活も今より貧しい時代でした。それでも、人々は伝統的な祭りを重んじて、知恵を精一杯絞り、祭りを楽しく過ごす工夫をしました。この日に欠かせない月餅は全部、私のお祖母さんが手づくりで作りました。小麦粉に黒砂糖や、胡麻油を混ぜてじっくり捏ね、木で作った様々な型に入れます。形が出来ると、団炉裏に入れてゆっくりと焼きます。もう少し贅沢なもの、金木犀の花と蜂蜜で作った餡の入った月餅です。果物等は、田舎の親戚から送られてきました。棗、山楂子、葡萄、トウモロコシ、枝豆、リンゴなどいろいろあります。

日が暮れ、金色の真ん丸いお月様が徐徐に顔を出して来ると、皆はテーブルを囲み、一家団欒の夜が始まります。お祖父さんが謹んだ顔で線香に火を点すと、皆は手を合わせてお月様にお辞儀をし、家族の健康、平安、親睦を祈ります。満月へのお祈りが終わると、大人達は子供たちに食べ物配り始めます。どれもこれもが年に一度食べられる珍しい食べ物ですので、皆すぐには食べないで、自分だけが知っているところに隠したりします。何日間も掛けて楽しんで食べるつもりなのです。ですから、自分の物を食べなく、他の子の物を盗んで食べるずるい子が現れたり喧嘩が始まったりしました。。。

八月十五夜の月は、一年中で一番大きい、一番丸い月だと言われています。その月の下で、何よりも美味しく思われる月餅を食べながら、お祖母さんからお月様に関する物語

を聞いたりします。毎年、殆ど同じような「嫦娥」\*や「玉兔」や「桂樹」の話ですが、いつも初めて聞くように、興味津々でした。

中秋の頃は収穫の季節です。中秋節は思う存分にこの豊かな季節の恵みを受ける祭りでもあるといえます。社会が高度発展を遂げた今日、スーパーでは高級な月餅、果物などを何時でも手に入れ、テレビでは多彩な番組を何時でも見ることができます。けれども、子供時代の、お祖母さんの手づくり美味しい月餅、そしてお月様に関する古い物語は、私にとって永遠の懐かしい思い出です。

\*「嫦娥(じょうが)」(中国の神話の人物)

かつて10個の太陽によって地上が焼けた時に、宝弓と神弓によって9つの太陽を射落とす、残る一つの太陽にもその出現の時間を決めさせたのが后羿(こうげい)で、その功績によって河川の神河伯の娘・嫦娥を娶る。嫦娥は、今は月の精として知られ、美しい女性の例えにもその名が使われる。

后羿(こうげい)は狩りの途中、老道士から不老長寿となって仙人になれるという薬を貰うが、妻や周囲を思うと呑みずいた。彼の多くの取り巻きの一人、蓬蒙が、この薬を欲し、后羿(こうげい)の留守に嫦娥に薬を求める。嫦娥は困り果て、蓬蒙に奪われるよりはと、自分が呑み、天に昇るが、夫恋しさに天まではいかず月にとどまった。これが8月15日のことで、毎年この日に嫦娥は月宮を出て地上を見下ろすといわれている。このため8月15日の月は特別に丸く美しくなる。また、后羿(こうげい)も嫦娥を思ってこの日になると月に捧げ物をしたのが中秋節の始まりとも言われている。

何媛媛：本名、何向真。

山西省出身。山西大学で日本語及び日本文学を専攻し、卒業。2002年来日して以来、地域の国際交流活動に力を入れ、古箏と中国語を教えています。町田市能ヶ谷町在住。

\* HPのアドレスが変わりました。中国琴の演奏をお楽しみいただけます。

Email:kakoushinjp@yahoo.co.jp

http://www.cn-jp.org/

## 北京からこんにちわ！

ういぐす  
有為楠 君代

※ 大家好！

今年の北京の夏は、すっきりしない空模様が続いています。先日来の猛暑もちょっと一息といったところです。

日曜日に、香山へ行ってきました。豪柏からは、紫竹院公園前から、714路のバスに乗って、乗り換えなしで香山に着きますが、その途中の見聞です。

乗車して15分も走ると、北京市内とは思えないようなどかな風景が広がります。突然、道路際に自動車の販売会社がずらっと並んだところに出ました。バス停の名前を見ると、「閔庄」と書いてありました。扱っているのは外国車が殆どの大きな販売会社で、私が見ている側では、日本はトヨタだけでした。

販売店は、皆、道端から100米近く中に入って並んでいて、その前には、低い植木が植わっており、植え込みの後ろが店の駐車場のようです。道からこんなに離れているので、辺りが広々として、すっきりとした街になっています。日本の道が狭いと感じるのは、道のすぐ脇まで高層建築が迫ってきて圧迫感を与えるからだであらためて思いました。(2005年6月29日)

※ 大家好！

昨日、今日と、北京は曇り空です。ラジオでは、気温34度といってい

ますが、カンカン照りがなければ、ほっとしています。

今日は、北京の病院事情をお知らせします。病院でびっくりしたのは、受付のところに、医師の写真と、料金表が出ていることでした。専門家は60元、教授は50元か40元、助教授は30元、主任は20元か10元、一般の医師は5元で、それぞれ希望の医師の名前を言って申し込むと、その後は、必ず「何元の専門家の誰、誰」「何元の教授の誰、誰」と、患者の名前の前に、申し込んだ医師の値段と名前をつけて呼ばれ、順番が近くなると、一般の待合室から、診察室近くの席で待つようマイクで呼ばれます。初めて聞いたときは、思わず笑ってしまいましたが、これが普通のことのようにです。

今回は、急患の付き添いで行き、急患は申し込んで、料金を払うとすぐ診てもらえました。急患のための、専用診察室(診察科目別に)があって、必要な検査はすぐ出来るようです。料金を払って診察用の用紙を貰うと、あまり待たずに検査してもらえます。CTもMRIもです。

点滴の必要があると、付き添いの人が、薬剤を買ってきて、(医師の処方箋を見せて、会計で料金を払い、薬局で薬を出してもらって)処置室に行くと、ずらっとベットや椅子が並んでいて、点滴をしながら、家族と一緒におしゃべりをしたり、ものを食べたりしています。

「病人に付き添いの家族は一人」という張り紙がありましたけれど、みんな無視していました。それと、車椅子借用料金は無料ですが、を借りるときは、圧金(保証金)を200元払います。

日本では最後にまとめて清算ですが、北京では、一つ一つ、お金を払ってからでないと先に進みません。北京の病院はお金で動いているという感じです。中国人のプラグマティズムを強く感じました。

(2005年7月12日)

#### ※ 大家好!

先日、茶芸館へ行ってきました。白石橋の交差点近くに、洒落た造りの茶芸館があって、一度入ってみたいと思っていましたが、やっとその機会に恵まれました。中は坪庭のようなしつらえで、水が流れていたり、木や竹が植えてあったりで落ち着いた雰囲気です。テーブルには、茶道具と七宝の灰皿がおいてあって、隣の席との間には、簾がかかっています。開放的ですが、落ち着いた空間です。

メニューを見ると、1200元、600元などというのがあって、びっくりしてしまいましたが、これは、茶葉50グラムの値段なのだそうです。他に、席料として、一人10元かかります。50グラムのお茶は、4~5回飲めますが、残りの茶葉は、もって帰ってもいいし、ボトルキープならぬ、茶筒キープをすれば、カードが発行されて、茶葉のある間は、一人20元の席料だけでお茶が飲める仕組みです。

初めに、小姐が作法通りにお茶を淹れてくれて、匂いを楽しんで、小杯のお茶を飲むと、その後も、こまめに回ってきては、杯に満たしてくれ、紫竹院公園の茶店の、1ポット60元のお茶と比べると、だいぶ割安な感じがします。

この茶芸館、中国の方はどんな使い方をするかと言うと、大事な商談するときを使うそうで、日本の、お茶屋さんと呼ばれる料亭とも、一脈相通じるところがありそうです。後は、恋人同士の語りとか、一人で読書とか、頭を休めるときに利用するそうです。

(2005年7月19日)

#### ※ 大家好!

北京は、昨日(22日)7時ごろから雨が降り出して、今日(23日)一日中降り続き、今もまだ降っています。

今日は、この雨の中を五道口まで出かけ、晴れの日には見られない、北京市の弱点を目にしました。それは、道路の水溜りです。歩道の敷石が緩んでいたり、へこんでいたり、あちこちに水溜りが出来、水に入らないように歩くのが大変でした。バス停の前には、5センチほど水が溜まっていて、時折、心無い車が通って、バスを待っている人が水をかぶるような光景もありました。バスに乗るのに、水に入らなければいけないかと心配しましたが、バスがいつもより歩道に近づいてくれたので、何とか乗り込みました。中国の方は、あまり足をぬらすのを気にしないようで、水の中をざぶざぶ走ってきて乗り込む人もいました。華奢なサンダルを履いた若い女性が、水の中を平気で歩いているのは、ちょっと奇妙な光景でした。

紫竹院につくと、歩道橋がまた水浸しです。踊り場が半分水に浸かっています。これはどうにも避けられないで、片足水に浸かりました。下りも同じでいつもの倍も歩いたような感じでした。マンションの入り口まで、足元を見ながら歩き、晴れの日よりぐっと疲れしました。発展が目覚ましい北京市で、足元がぬかるんでいる印象です。

(2005年7月23日)

#### ※ 大家好!

最近の北京は、お日様のご機嫌がいまいちで、スカッとした夏の太陽ではないのですが、暑さだけはいっぱいしの夏です。

暫く前になりますが、泰山に野生のトラが二匹出て、泰山一帯が立ち入り禁止になっているそうです。トラが初めて目撃された時には、動物園等、トラを飼育している機関に、逃げたトラがいまいちどうか問い合わせをしたりして、トラの身元確認をしたのですが、どこにもトラがいなくなったケースはなくて、結局野生のものだと結論付けられました。野生のトラが残っている、しかも、泰山と言う観光地の周辺で生き残っていたなんて驚きです。

もう一つは、成都近くの都江堰にパンダが現れた話題。こちらは、

ラジオのローカルニュースと言うか、一帯の環境が良くなったという話の中で、「…だから都江堰にもパンダがあらわれた」というだけで、それでどうなったかは話題になりませんでした。あの都江堰に現れたと言うのを聞くと、舗装道路を歩いたのかしら、石段を降りてきたのかしらとちょっと気になります。

二つとも小さなニュースですが、中国の自然の奥深さを感じます。中国の歴史を読んだり、実際に中国の方とお付き合いで、「懐の深さ」を感じることがありますが、「こんな奥深い自然に囲まれて生活しているからなのか…」などと妙に納得してしまいます。

(2005年7月31日)

#### ※ 大家好!

やっと念願の、蓮花池公園に行きました。豪柏からは、西三環を南に行くだけ。バス停5つほど先の、六里橋北で降りればすぐのはずでした。が、あるはずの入り口を見落としてしまい、だいぶ歩いて、もう公園も終わりという所に建つ、大きなホテルのドアマンに、道を訊ねますと、ホテルの横の道を行けば良いと教えてくれました。

その道の突き当たりにやっと、蓮花池公園南入口という、看板を見つけました。小さな門で、中を覗くと、ちょっと花が植わっていますが、とても公園とはいえないような雰囲気、腰が引けてしまいました。切符売り場の人に、地図がありますか、と聞いたら、無いとの返事。別の入り口はありますか、と聞くと、右へ行けば、東の正門、左へ行けば西門があると言うので、やっと入る気になりました。入場料は、5元。紫竹院公園より高いです。

門から見えた木立の向こう側に大きな池が広がっていました。池の左方向と、向かい側に蓮の花があるようです。池の周りは散策路が整備されていて、ボートも浮かんでいました。やっと中国の公園らしくなって、一安心。帰りは、西門から出たいので、右回りに、池のほとりを歩いて見ました。ゆっくり、でも散歩としてはちょっと早めに歩いて、一周たっぷり45分かかりました。遠くから音楽が聞こえています。池に張り出した石の舞台のようなところで、雑技をしている音楽でした。入場料を取っているようではありませんが、出演者は、派手な衣装を着て、本格的な雰囲気でした。実地の練習というところでしょうか。

その先に、蓮の花がありました。盛りは過ぎていますが、名残花がみられて、最盛期にはさぞ見事だろうと想像できました。その蓮の花に囲まれるように、「蓮の文化館」と言う小さな建物があり、中で書道展が開かれていました。素敵な作品がいっぱいありました。その先に、石組みから水が流れ落ちて、池に入るような水路があり、睡蓮が植えてあります。睡蓮はたくさん咲いていて、綺麗でした。

池の周りは、なかなか変化に富んで楽しめました。あえて苦言を言えば、案内板が少ないことです。

(2005年8月9日)

#### ※ 大家好!

北京にも秋が来ました。1週間以上も雨模様の日が続きましたが、今週に入ってから、朝夕ふっと涼しさを感じるようになりました。今日は、朝から久しぶりに晴れたのですが、その空は、もう秋の空でした。

最近、北京の弱点を目にする機会がありました。北京の弱点、それは道路の排水です。以前、バス停付近で水がたまっている話をしましたが、先日、雨の中を車で走っていて、ひどい渋滞に巻き込まれました。

その渋滞の原因は、交差点の大きな水溜りでした。片側3車線の広い道でしたが、半分近くが水をかぶっていて、おまけに道路が穴だらけで、車が穴と水溜りを避けるので、何台も通れず、時間がかかるので、渋滞になるのです。

こんなひどいところは少ないですが、他にも、道路に水がたまっているところがあちこちにありました。2、3日して同じ道を通ると、水はもうなくなっているのです。一時的に排水能力が、著しく劣るのだそうです。北京の中心地区では考えられない現象ですが、オリンピックまでに解消できるのでしょうか?

(2005年8月19日)

\*お仕事で半年ほど北京に滞在する「わんりい」の中国語の仲間からの、ほかほかと湯気の立つ北京だよりです。

2005年3月、私たちは、再びゲオバトゥ村を訪ねました。今回は、「本当に図書館建てるんだよ！」という予告編？ に行ったって感じです。つまり、村の中心地にある図書館建設予定地（まだその半分は、立ち退き予定の豚の柵に囲われ、豚が暮らしている）に、簡単な小屋を作って、そこで、子どもたちと遊んだり絵本を見せたりして、「ほら、こんな風にみんなが集まれて、本を読んだり絵を描いたり・・・楽しいことができる場所を作るんだよ」ということを、実際に感じてもらえればな・・・ということだったのです。

メンバーは、設計・建築を担当している鈴木晋作さんと私、そして学生の友岡清秀くん、森田大輔くんの2人が、絵本をたくさん入れた重い荷とともに参加してくれ、食欲旺盛なメンバーとなりました。いつも泊めてもらうサイガウ爺さんのおうちが不安に思わないように、私たちは米袋をかついで、村に行きました。

今は乾季の終わり。そろそろ暑くなり始める時期です。ラオスでは、本格的な雨季のはじまる前の4月が一番暑いのです。山の村だってもう寒くはないだろう・・・という予想に反して、寒い！ある朝は霜がおり、温度計を見たら、3度でした。農作業がはじまる前でまだみんな忙しくないだろう・・・という予想もはずれて、人々はみな畑に出払っていました。

ここゲオバトゥ村では、焼畑で、陸稲とトウモロコシを作っています（棚田も少しある）。これまで私が他の場所で見たと焼畑は、火入れ後、耕さずに、穴をあけて種を蒔いていましたが、ここの土は固いので、みんなで耕さなくてはいけないのです。今日はこっこの畑、明日はあっちという具合に、みんなでパウジョー（労働交換）をして、毎日山の畑に出かけていました。子どもたちも結構あれこれ、家や畑の仕事で忙しそうです。畑に行かない日も、男の人たちは農具の打ち直しなど、朝早くからサイガウ爺さんの庭の片隅にある鍛冶場へきて、トンテンカンテン鍛冶仕事をしています。

ある朝、サイガウ爺の鍛冶場では、爺さんと婿がいっしょに農具を打ちなおしていました。その回りには4～5人の男の子たちがたむろしています。爺さんたちは真っ赤に焼けた鉄に、でかいトンカチを打ちおろしては鉄を切っている。真っ赤に焼けた鉄に、刃が食い込んで切れていく様子は迫力で、みんな「わぁ」という顔をしてみえています。男の子たちは、大人の仕事の合間を縫っては、鉄の切れ端を焼いては打っています。こうして、遊び半分、大人の仕事をしたりまねたりしながら、いつのまにかできるようになっていくんだなぁ・・・と思いました。

こうすることが、ある意味では、「図書館」なんだと思いました。知識や情報が、その場でじかに伝わっていく。日本ではもう本の中やらテレビの中にしかないものが、この村では、じかにここにあるのです。だから、こうした山の村の中、生活のあちこちにちらばっている、大切なこと、伝えたいこと・・・を大切にしたい図書館活動が作っていただけたらいいな・・・と思いました。

### 「図書館みたいで図書館でない？ 本からはみ出した図書館活動？ を作りたい」

今回、村の中心地の図書館建設予定地にできた竹小屋 ほったてドーム?? は、どう見ても、図書館からはほど遠い建物なのだが、村の人々は夕方農作業からの帰りに、このへんでこんな建物ができあがっているのを見ると、少し心配そうに、「これがあ～例の建物かい？ 図書館ってやつ？」と尋ねていたのがおかしかった。「ちがうちがう、これはホンモノじゃないよ。これはウアッシー（遊び）なの」と答えただけ・・・。とにかく、村の人々には、「今度できる建物は、子どもたちが遊び回っていて、絵本や本を自由に見たり読んだり、絵を描いたりできるところらしいぞ」ということが伝わったかもしれない。私達自身、私達が作ろうとしているスペースが、たくさんたくさん本があって静寂な・・・日本の図書館のイメージとは全然違うもので、実際に、「図書館」という名称で呼ぶべきかどうかどうか？ よくわからない。

モンの子どもたちは忙しい。絵本を見に来ていたかと思うと、もう水汲み、トウモロコシ挽き、山の畑へ行っている。さっきまで牛を引いていた子が、走って絵本を見に来る。いつのまにか働いていて、いつのまにか遊んでいる。子どもたちはちゃんと家の中で役目を持っているし、小さい子どもももっと小さい子の面倒を見たりしている。えらい！のである。でも、だからこそ、子どもが子どもでいる場所が必要なんだ・・・と、今回強く感じた。その場所に来たら、家の仕事やら役割から離れて、おおはしゃぎで跳ね回ったり、絵を描きまくったり、お話の世界に入り込んだりできる・・・自宅とは違う自分の場所・・・そんな場所になったらいいなぁ！と思う。そして、もちろん、子どもたちだけでなく、大きい人たちも、本やお話の世界を通じて、興味、知識や情報を広げ、世界を広げていってほしい。そんな場所になればいい。

また、本だけにこだわらずに、生の村の知識、経験の集積所・・・とでも言ったらいいの？ モンのいいところ、残したい伝えたいもの・・・を残していける、伝えていける場所にもなればいいと思う。モンは元々文字を持っていないので、いきなり文字という形で残していく

ことは難しいかもしれない。でも、まずは写真でも音声でもいいから、モンの人々自身が、自分たちに残していきたいものを記録して残し、伝えていけたらいい。

今回、私達は、撮りきりカメラをたくさん持って行って、村の子どもたち、大人たち20人ほどに渡し、好きなものを撮ってもらった。もちろん、あまり上手とはいえないけれど、私達日本人には決して撮れない写真の数々、蒙の生活の端々が見えて面白かった。今度は、子どもたちにテープを渡して、お年寄りの話を録音して集めてもらってもいいかもしれない・・・そんな風に自分たちで記録していくことだってできるということ・・・そんな活動をあれこれ探していきたい。

一方で、現在、ラオスの山の村を取り巻く状況は、急激に変化している。今までの伝統的な生業を続けていたのでは、食べられなくなってきているのだ。そんな中で、自分たちの文化を伝承していくことももちろん大切だけど、それと同時に、見直したり、変えていかななくてはいけないことも多いように思える。

例えば、モンの人々はこれまで長い間移動してきたから、定住して一つの土地を長く耕すということがなかった。だから、焼畑以外のことは、あまり知らないのである。土を改良していこうという発想がない。牛たちは畑ではなく、道ばたにたくさん糞を落としているが・・・。「牛糞や鶏糞、日本では売ってるよ」なんてこと信じられ

ないことなのだ。本当は、農業の本をたくさん図書館に入れればいいのだろう。でも、ラオスには本もあまりないし、やはりモンの人々は読むのは苦手だ。だから、きつこういうことは「本」ではなく、経験のある方々に、「図書館？」を訪ねてもらい、堆肥の作り方、果樹の接ぎ木の仕方などなど教えてもらうことができたらいいのではないか・・・このようなことも含めて、いろいろな活動あり！の図書館を作っていきたい。

図書館みたいで図書館ではなく、本もあるけれど本だけではなく、本からはみ出した図書館活動。この「図書館？」はきっと小さな建物にすぎないだろうけれど、山の村の外の世界へ、山の民の内の世界へと大きくつながっていく・・・そんな可能性を広げていきたい。

### \*ラオス 山の子ども文庫基金

なかなか本に触れる機会のないラオスの山の子どもたちにとって、「図書館」や「文庫」は馴染みのないものですが、これからの子どもたちが、本のお話の世界の楽しさを知ること、未知の、より広い世界への扉を開け、心の世界を広げていくことが出来る場所、自分たちの民族独自のお話に改めて出会っていくことで、自分たちのことを見つめていくことが出来る場所、として「山の子ども文庫」を作りたい。

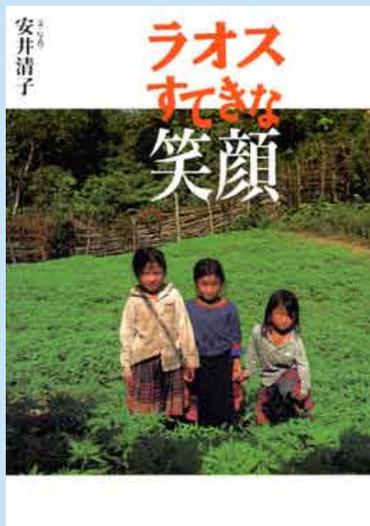
(ラオス 山の子ども文庫基金 <http://www.geocities.jp/pajhnbky>)

## 中国を読む25(番外編)

## 「ラオスすてきな笑顔」

安井清子

NTT出版



ラオスを世界地図で探す。中国の南部に隣接し、ベトナムとタイ、カンボジアそれからちょっとミャンマーに囲まれている。ラオスから日本へ指をスクロールさせた。あ、意外に近い。日本からラオスへスクロール。そしてまたラオスから日本へ…。著者の安井清子さんはそんな生活を続けてもう10年以上。気が付いたらきらきらした思い出がラオスに詰まっていた。それらがあふれて一冊の本になった。

安井さんは、他の人が見過ごしてしまう小さなことも大切に。特に子どもたちを見守る愛情豊かな視線は心がぎゅっと締め付けられるほど。彼らの成長を

心から喜び、彼らの知恵に素直に驚き、彼らの幸せを切に願っていることが、写真からも文章からも伝わってくる。子どもたちは正直だ。シャッターを切る安井さんのことが大好きな彼らは、とびきりの笑顔で写真に収まる。学校で使うノートさえ潤沢にはないけれど、子どもたちはめちゃくちゃ元気で、タケノコのようにまっすぐ、たくましく生きている。

大人は子どもたちより複雑だ。戦火に追われ、難民キャンプで働き盛りのときを無為に過ごした人もいる。けれどラオスに暮らす人たちは、故郷で文化を守って生きていくことの大切さを思い、気高く生きている。染物や刺繍、スカートの作り方。焼畑に農作業、お正月の過ごし方。ひとつひとつの行事に人の温度を感じる。ラオスで触れた優しさが、今でも安井さんの心を温かくするのだろうな、と思う。

厳しい土地で生きる人たちとの出会い。ラオスへ足を運べば運ぶほど愛する人々が増えていく。こんな豊かな生き方をする女性もいる。(真中智子)

## アフリカとの出会いⅢ —アフリカは「ポレポレ」か？—

竹田 悦子 アフリカン・コネクション代表

「ポレポレ」という言葉を耳にされたことがありますか？サファリ、ジャンボに続いて有名なスワヒリ語の言葉である。「ポレポレ」は、スワヒリ語では”POLE POLE”と表記し、よく「ゆっくりゆっくり」と日本語で訳されている。ひとつにすると“POLE”で、「すみません」という違う意味になる。そして、必ず「すべてがポレポレなアフリカ」、「アフリカ人のようにポレポレで行こう!」という風に使われる。私もアフリカに行く前、いろんなガイドブックを読んだ。広大な大地に落ちてゆく太陽をバックに象の群れがゆっくりと横切ってゆく。マサイの人々が牛を追いつつゆっくり歩く姿。「これがポレポレかあ」と憧憬の眼差しで見つめていたのを思い出す。その頃、大手町のビルに囲まれた職場で働いていて、対照的に見えたアフリカの景色に憧れ、そんな景色の中に早く自分も入りたいと願ったものだ。

そして月日は流れ、アフリカから帰国した。私は、ポレポレを見たのだろうか？ポレポレの中で生活していたのだろうか？答えは、「ノー」だ。私が暮らしたナイロビおよびその近郊の町は、ハラカ ハラカな時間が流れていた。バスに乗るときもたまたましていると、「ハラカ ハラカ」と背中を押される。友達とゆっくり喋りながら歩いている時もだ。横断歩道のない道を横切るときも、車の運転手はそう言って、早く渡るように促してくる。「ハラカ ハラカ(HARAKA HARAKA)」。日本語で「急いで、急いで」という意味だ。「これじゃあ、朝の東京駅の通勤ラッシュ時の横断歩道と同じではないか？」と着いて数日のうちに思った。マスコミや旅行会社のイメージ戦略にだまされた感じさえしていた。確かに、行くところに行けばポレポレなアフリカを感じる事が出来る。高額なお金を出して泊まるサファリパーク内にあるロッジからの眺めや、外国人なんて見たことない田舎町の片隅で、のんびり紅茶をご馳走になるひとときや。でも、私の見たアフリカは、やっぱり早口・早足で闊歩する町の人々の姿だ。

アフリカの経済はますます二分していく傾向にあると言われている。都市部のような資本主義の競争社会と農村部のような伝統社会だ。ケニア経済も例外ではなく、ナイロビのような大都市と、農村部の経済格差はどんどん広がってきている。その象徴がスラムの出現であろう。東アフリカ最大の‘キベラスラム’は、その規模と歴史とも一番だ。ナイロビで仕事を求める農村部からの「国内移民」の行き先が、ナイロビ近郊にくつとあるスラムなのだ。働き手の男性が一人で来るというよりは、家族全員での移住が多い。

そんなキベラのスラムで学校を開いているケニア在住の日本人女性に同行させてもらい、スラムを訪ねたことがある。その巨大なスラムは、きちんとした町である。道が作られ、どん

どん奥へ入っていけるようになっている。狭い道をたどり、いくつもの家を通り過ぎると、彼女の運営する学校があった。教室には小さな子供たちがびっしりいて、元気よく挨拶してくれた。机やいすにきちんと座り勉強する様子を見せてもらう。そんな子供たちの後ろにはスラムが抱える問題が見え隠れする。ごみ問題、衛生問題、教育問題、雇用問題。そのすべてが貧困からくるのは、確かだ。そして、このスラムに住むには無料ではない。きちんと家主さんに家賃を払うのだ。もちろん普通よりは格安だが、滞納すると鍵をかけられ部屋に入れなくされるらしい。教会や病院もあり、市場もある。もちろん、水道や電気は整備されてはいないけれども、ここは住民手作りのきちんとした町なのだ。

またいろんな場所から来た人々の集まりであることは、そこで売られていたいろんな部族の食材から伺える。魚を食べるのは、ビクトリア湖周辺に住む西ケニア州のルオー族だろう。豆を量り売りしている店もある。豆を主食にしているのは、キクユ族だ。そして、はるか昔ケニア鉄道建設時に労働力としてつれてこられた隣国スーダン人もいる。彼らは、イスラム教で、ほとんどがキリスト教であるケニア人との間で摩擦を生じさせることもあるそうだ。その日本人女性は、「スラムには、ケニアの歴史が詰まっている」と結んだ。

そしてケニアのスラムをその後もいくつか訪ねたが、ポレポレな人や場所はなかった。すべての人が、生きるか死ぬかのサバイバルだった。サバンナを生きる野生動物たちもそうであろうと思う。独立後のケニアは資本主義の道を選択し、人々は生活するための糧をお金に求めた。いや、求めるように社会に強いられてきたのかも知れない。そして、お金を手に入れるため地方から家族総出で、ナイロビなどへの都市部へ移住してくるのだ。統計が示すように一日一ドル以下の生活をしている人々が町にはあふれている。

最も伝統的な生活を今でも続けているとされるマサイ族の生活にも変化が現れてきている。彼らは、伝統衣装を身にまとい、牛を追って、牛と共に生活してきた。しかし私は、マサイ族出身のビジネスマンを多く知っている。彼らはスーツを着こなし、携帯電話を片手に、流暢な英語で、ビジネスの世界に生きるどこの国でも見る事の出来る普通のビジネスマンだ。週末は、地元に戻って牛の世話をすることもあると聞く前は、その人がマサイであることも分からなかった。広大な土地を所有してきた彼らは、それを売り、資本とし、大規模なビジネスを展開している人も多い。

「昔は豊かだった」と振り返るマサイ族の老人の目には、独立後駆け足で資本主義化していったケニアはどう映っているのだろうか？それは、私の祖父母が戦後急速な経済発展を遂

げた今の日本と昔の日本を比べたときに思うことと同じなのだろうか？しかし、発展が見えてこないアフリカの経済は、途上国経済との名が示すように、今もあくまで途上なのだ。独立後すぐのケニアのGDPは、7%の成長率だった。そしてその後は現在にいたるまで下降の一途をたどっている。豊かだったケニアが、貧困に苦しんでいるのは、そんな昔からのことではない。私は、貧困が始まったのは、資本主義経済に組み込まれていった独立後からではないかと考える。お金が、人々の生活を支配し始めたからではないかと考える。

今でも農村を訪ねれば、豊かな生活をしていただころの面影が感じられる。畑から採れる恵みで家全員を養い、子供は地域の青空教室に行き、ゆっくりと生活していたアフリカ本来のポレポレな時間。

「植民地主義」。その後遺症は、こうしてアフリカのそのものあり方を変えてしまった。アフリカの今後を考えるG7の会議が、イギリスのブレア首相主催の下開かれた。「G7諸国が、今一丸となってアフリカの発展のために取り組めば、アフリカは変わる。アフリカは救われる」と。私は思う。アフリカを変えるのは、もうやめてもらいたい。それよりも豊かだったアフリカをもとのようにするには、どうしたらよいかを考えてもらいたい。そしてそれを決めるのは、アフリカ人自身であるはずだ。

7月号のエコノミストの表紙を飾る表題の文字に心惹かれた。“Helping Africa to help itself”つまり、アフリカの自助努力を応援しようということだ。

### 【‘わりい’活動報告】 ベトナム料理交流会

2005年8月21日 於：まちだ中央公民館料理室

一昨年、‘わりい’の料理講座、ベトナム料理の講師を務めてくださった、ベトナム・ホーチミン市からの留学生、ファム クオック タンさんをお招きして、8月21日ベトナム料理交流会を楽しみました。

「中国語で歌おう！」会の指導を下さっている趙鳳英さんや和光大学の留学生・陳佳さん、男性会員5名も加わった総勢24名の参加者は、ファムさんに生春巻きの巻き方のコツなどを教えてもらいながら、生春巻きに挑戦し、太かったり短かったりながら、味はベトナム料理店の味に引けを取らない美味しい生春巻き50本あまりを巻きました。

その他、青いパイヤのサラダ、牛肉のフォー、鶏肉のレモングラス炒め、小豆のチェなどなどベトナム料理5品を一緒に作って、一緒に頂きながら和やかに歓談。

ベトナム料理は、特別に辛かったり、塩辛かったりせず、野菜たっぷりの優しい風味で私たち日本人の舌にもよく合い、それが若い女性たちの人気のもとなのでしょう。

最後は、趙鳳英さんと一緒にイタリア民謡の「オオ ソレ ミオ」(我的太陽)を中国語で合唱しお開きにしました。

ファムさんは、今年から東洋大学機械科に入学し、勉学もますます忙しくなっていますが、相変わらずの穏やかな笑顔で交流会を楽しんでいました。



### 松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

どんぼうのしばし行く道定まらず

yī zhī xiǎo qīng tíng  
一只小蜻蜓

fēi lái fēi wǎng hé qù cóng  
飞来飞往何去从

háng jìng cóng bù dìng  
行径从不定

季語：蜻蜓，秋。

此句純屬寫生句，尤如白描般勾勒出了大自然的實態。从中亦可看出作者敏銳的眼光。

俳句一個很重要的組成因素就是象徵性，這首句作也不列外。從亂飛不定的蜻蜓，我們可以聯想到人生的不測和迷茫。

### “わりい”のおたより会員になりませんか？

入会金なし 年会費：1500円

‘わりい’は、「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知ることは、国や民族を超えた理解のきっかけになるのではないか」という趣旨で、市民レベルでの国際友好を目指して、1992年より活動している市民ボランティアの会です。これまで目的に添った講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を数多く開催してきました。

活動の様子は、年10回発行される会報‘わりい’と‘わりい’のHPでご覧いただければと存じます。

‘わりい’のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、‘わりい’の全ての活動に参加できます。おたより会員の年会費は、1500円で、会報‘わりい’の郵送料と活動のサポート費に充てられます。

問合せ：‘わりい’事務局(1Pに掲載)

## 四姑娘山・花の山旅から

四川省の省都・成都から約200km西にある四姑娘山自然保護区には氷河が作った急峻で複雑な氷河起源の地形がそのまま残り、1996年に中国国家級自然保護区に指定されました。6250mの四姑娘山を筆頭に、三姑娘山、二姑娘山、大姑娘山と4つの峰が続いており、4人の娘の化身とされていますが、現在でも懸垂氷河や氷床が残り、多くの岩峰や湖沼があります。また、何種類もの青いケシを初め、多種多様な高山植物が美しい花を咲かせることでも知られています。今年の夏、四姑娘山自然保護区管理局特別顧問を務めている大川健三氏の案内で、有志9名が四姑娘山自然保護区山中の海子溝の夏を楽しみました。(田井)



巴郎山の斜面は色とりどりの花・花・花…



四姑娘山の登山口・日隆から馬に乗る 正面の山並みは四姑娘山



懸垂氷河から流れ落ちる幾筋もの滝を背に ここも足元は花一杯だ



↑ ムカゴトラノオとエーデルワイスで真っ白に薄化粧した尾根路 背後に成都からの自動車道が見える(鍋庄坪)



氷河から流れ出る水を集めた清冽な流れ(双橋溝)



← まだ咲き残っていた赤い花のブルーポピー



↑ エーデルワイスは馬も好物



四姑娘山 6250 mが一瞬青空に全容を見せた(鍋庄坪)



山頂の海子を埋め尽くすバイカモの大群落(夾金山)

<犀牛海子で我々を歓迎してくれたブルーポピーたち いろいろ>



↑ 氷河から流れ出る流れで潤う大湿原・花海子キャンプ地  
(3800m3泊)は放牧された牛たちの楽園 ↓



写真背後の急斜面を馬に乗って直登する前にトリカブトの群落の中で休憩



まだ咲き残っていた桜草の仲間  
花の直径およそ 5cm



黄色いけれどこれもブルーポピー



急登の向うで我々を待っていてくれたハイキングの目的地・犀牛海子  
(4300 m) 対岸は黄色や青や紫のさまざまなブルポピーの群生地



高さが 50 ~ 60 cm にもなる黄色いランの種類  
海子溝の草原のあちこちにまるで王者のような風格で堂々と咲いていた

写真提供：沖田辰夫 佐藤勇治 小林慶子 日高敦子 福島正子 田井光枝

ポートサイド(エジプト)を出港すると、通常のクルージングでは北上してギリシャに向かうのだが、トパーズは西に進む。ポートサイドを出港したとたんに船が揺れだした。久しぶりに酔止め薬を飲んだ。地中海では2〜3日で次の寄港地へ着いてしまう。

次の寄港地、トリポリ(リビア)の上陸説明会があった。トリポリ寄港中は、キャビンにアルコール飲料、女性の水着写真等が掲載されている本、豚肉製品を置いてはいけないという。船側で預かり1ヵ所に集めて封印し、出港後に戻すとのこと。豚肉の入ったカップラーメンも豚肉製品に入るそうだ。船内のレストランやバーでのアルコールの販売もストップ。イスラムの国だからか…?寄港中に税関職員によるキャビンへの立入検査もありうるとか…。私のキャビンにはそれに該当するようなものは置いてなかったが、日本から会津の酒を持ち込んでいたTさんはどうしたのか後日聞いてみると、「預けるはずないでしょう、そのまま置いといたわよ!」とのこと。もちろん、その酒は没収されることもなく無事で、後日ご馳走になった。各キャビンからどのくらいのものが預けられ封印されたのか、実際に立ち入り検査は行われたのか等、それに関して船側の説明はなかった。

リビアについて知っていることといえば、カダフィー大佐という名前くらいだった。リビアがコースに入っていたからこの船旅に参加したという人とはえらい違いだ。帰国後今頃になって、“リビア新書”(野田正彰著)を図書館から借りて読んでいる状態だからドロナフ以下である。

自由行動は難しいからOPに入るように勧められ、「古都ガダーミスとサハラ砂漠」に参加した。トリポリから空路40分、国境近くのオアシスのまち、ガダーミスに飛んだ。“砂漠の真珠”の別名をとる。旧市街は城壁に囲まれ、迷路のような細い通路に沿って、日干しレンガに石灰を塗った白い家が軒を並べている。外観のシンプルな白壁とは異なり、室内は赤い塗料を使った装飾文様で彩られている。かつて女性は、姿を見られないように、壁で覆われた2階テラスの通路を使って、家々を移動したという。モスクも男女別々で、男性用は広く明るい快適な場所に位置しているのに対して、女性用は狭く暗い半地下のようなジメツとしたところだ。昼食後はバスで砂漠へ移動。砂漠散策はバスで車の僅かな日陰で休憩しながら、砂パンとミントティーをご馳走になり、砂漠の民トゥアレグ族のダンスを観た。暑さでかなりボーッとされていて楽しむところまではいかなかった。衣装を身に着けて、ジリジリ焼けつくような太陽の下で踊る彼らには申しわけなかった。空路トリポリに戻ったときには日も落ちて暗くなっていた。

ポートサイドからチビタベッキア(イタリア)まで、ワインジャーナリストの番匠國男さんが水先案内人として乗船した。彼の講座にはほとんど欠かさず出席し、3回あったワインテイ

スティングのうちの2回参加した(各回定員60名、参加費1,000円)。毎回違った、仏、伊、西、3種類の地中海ワインを試飲できる。夕食後、一息ついた8:45スタート。会場は丸テーブルのある7階ウインジャマール。各テーブルには、①②③と大きく数字が印刷されたA4サイズの白い紙、その数字をコースターに見立てて、すでにワインが注がれた3コのグラスが置かれている。ピアノの生演奏も流れ、いつもの講座とはちょっと違った雰囲気が漂う。テーブルについただけで、もうワイン通になった気分だ。番匠さんの話がスタート。まず1番目のグラスから。初めに色を見る。ラクリマクリスティ(キリストの涙)というイ



パンとミントティーをサービス



砂漠の民トゥアレグ族の踊り

タリア産の赤ワインだ。赤の色も新しいワインは濃い紫だが、熟成するにつれてレンガ色になっていくという。私の目にはこのワインが若いのか、熟成されたものなのか全くわからない。次に香りを嗅ぐ。グラスに鼻を突っ込むくらいに近づけてクンクン嗅ぐようにと言われる。それからグラスを手を持ちクルクル回し、そしてまた香りを嗅ぐ。ワインと空気が混じり合って最初とは違った香りになったことに気づくという。そのあたりから嗅覚に鈍感な私にはついていけない。それから口に含んで、鼻から抜けるまた違った香りを感じて、そしておもむろに飲み込む。ああ〜、もうダメ! 2番目のグラスは白のフランスワイン。3番目はスペインの赤ワイン。番匠さんは、それぞれのワインの香りを言葉にして、「これは馬小屋の藁の香りがします。」とか「甘草やブラックベリーやスグリの香りもしますね。」などと表現している。そして一口飲んで、「これは厚みのある完熟ワインですね。」

などと言われる。ワインテイスティングに参加したことをちょっと後悔する。それでも、翌々日、また、参加した。香りの違いは、やはりいまいまいち分らない。1回目よりはグラスのまわし方が上手になったかなあ…。それでも、2回のワインテイスティングで、赤ワインの美味しさを知ったことは、大きな収穫だった。なにしろそれまでは、魚でも肉でもワインは白の中辛だと決めていたのだから…。

ワインの美味しさを知ってしまったからというもの、トリポリ後の寄港地(チビタベッキア、マルセイユ、ラスパルマス)では、ワインを数本ずつ買いキャビンに持ち込むようになった。アルコールの嫌いでない者の考えることは、大体みんな同じようで、そんな仲間がボトルとマイカップを持ってひとつのキャビンに集まり、“ワインパーティー”と称して週に1〜2回の酒盛りをするようになった。地中海ワインがなくなるころには、次の寄港地のペルーやチリのワインを買いこみ、そのパーティは横浜まで続いた。キャビンでの飲食は原則として禁止されているので、これは他言無用ということでここだけの話だ。

船での日々の生活も、この辺りから少しずつかわってきた。

「スリランカ・バティック展」



バティック（ろうけつ染め）というインドネシアが有名ですが、スリランカのバティックは、下絵から全て手描きで絵画的な芸術性があり、独特のデザインと色合いはなかなか個性的です。今回50点ほどの作品を展示します。

9月5日（月）～11日（日） 10：00～18：00（初日：13：00～ 最終日：16：00迄）

於：ぱるるプラザ町田 6F ギャラリー（町田東急ハンス隣接）  
 主催：日本スリランカ文化交流協会  
 問合せ：Tel 042-735-9583（為我井）  
 E-mail：brb35673@nifty.com

賈鵬芳&天華アンサンブル 2005

～中国著名二胡演奏家・周耀錕氏を音楽監督に迎えて～  
 豪華メンバー総勢14人による、中国音楽の真髄を聴く！！

賈鵬芳 周耀錕 賈鵬新 費堅蓉 王明君 馬平 錢騰浩 姜小青  
 張林 王霄峰 四家卯大 何晶 シュウミン 井野信義

2005年9月19日（祝）18：00開演（17：30開場）  
 於：紀尾井ホール  
 四ツ谷駅麴町徒歩6分、赤坂見附駅D出口（銀座線、丸の内線）徒歩8分  
 全席指定 前売り：S席 6,500円 A席 5,000円  
 B席 4,000円（当日券500円増し）

主催：企画制作：ラサ企画

申込み&問合せ：TEL/FAX 03-5748-3040 ラサ企画  
 E-mail lasanon@db3.so-net.jp

万馬馬頭琴アンサンブル演奏会

馬頭琴奏者チ・ブルグッド氏が指導の、万馬馬頭琴教室（東京・足利・佐倉の3教室）のメンバーを中心とする万馬馬頭琴アンサンブルが、今秋、演奏会を催します。

2005年10月15日（土）13:30開場 14:00開演  
 日本橋社会教育会館ホール  
 103-0013 東京都中央区日本橋人形町1-1-17 03(3669)2102  
 東京外0日比谷線「人形町駅」A2番出口 徒歩3分 / 東京外0半蔵門線「水天宮前駅」8番出口 徒歩5分 / 都バス錦11 秋26 水天宮停 徒歩3分

入場料：500円

演出：チ・ブルグッド

演奏：万馬馬頭琴アンサンブル（馬頭琴）西上和子（ピアノ）  
 内田充（ギター） 管野吉哉（パーカッション）

入場券の申し込みは、予約制で当日受付にて現金と引換えでお渡しする予定です。

お問合せ・予約は、manba@hotmail.co.jp まで。

古箏幻想

— 隋虹 来日15周年記念リサイタル —  
 ～恩師 王昌元大師を迎えて～  
 友情出演：伍芳

2005年10月10日 14：00開演（13：30開場）  
 於：横浜みなとみらい はまぎんホール ヴィアマーレ  
（JR・横浜市営地下鉄 桜木町下車 動く歩道利用5分 / みなとみらい線 みなとみらい駅下車「クイーンズスクエア連絡口又はけやき通り口より7分）



3000円 全席自由

申込み&問合せ：

TEL/FAX 042-379-6332

E-mail zui-kou@s3.dion.ne.jp

青少年『国際・友情・フェスティバル』

～ 世界は愛で変えられる ～

2005年9月4日（日） 13：00～  
 於：町田市青少年施設 ひなた村 & カリヨンホール  
小田急線町田駅北口POPビル前21番バス停（本町田經由野津田車庫又は鶴川行き）ひなた村下車5分

- ◆世界の音楽と遊ぼう カリヨンホール  
 ～コーラス 各国の踊り サムルノリ遊びなど～
- ◆国際・友情・音楽の集い てっぺん広場  
 ～和太鼓 ゴスペル ラップ 民族舞踊等～
- ◆食文化の集い - 模擬店いろいろ てっぺん広場  
 主催：青少年『国際・友情・フェスティバル』実行委員会  
 詳細問合せ：TEL/FAX 042-724-9073

♪♪ 笑顔が美しくなる ♪♪

「中国語で歌おう会」 会員募集中！  
 明るく楽しい中国人歌手・趙鳳英さんと歌いましょう！



9月の講座 9月16日（金）  
 19：00～20：45

麻生市民館・視聴覚室（新百合ヶ丘駅下車北口3分）  
 ●9月の練習曲「常回家看看」と「我が太陽」の復習  
 指導：趙鳳英さん（中国四川省出身歌手）

体験参加（1500円）歓迎します。ご自由にご参加ください！！尚、ご参加される方は録音機をお持ちください。問合せは、「わんりい」事務局へどうぞ

## 第15回中国文化の日（主催：財 日中友好会館）

### ■中国四川省の伝統演劇 - 川劇公演 瞬時に面を変える秘伝の技・変面のの驚異！

2005年10月15日（土）、16日（日） 15：00開演 17日（月） 19：00～

\* 入場：事前予約者 30分前 当日 15分前（先着順）

於：日中友好会館地下一階大ホール

出演：中国四川省川劇学校

上演演目：＜翎子舞踊 - 俏、巧、翹＞ ＜秋江＞（水袖舞踊 - 袖舞風影）＜石懷玉驚夢＞他

**参加費無料** ①事前予約（200名）9月12日（月）～10月13日（木） 平日 9：00～17：30 但し、10月1日（土）以降は、土日祝日も受付可 ②当日先着順

### ●中国四川省で生まれた伝統演劇 - 川劇の見どころ

川劇は、中国四川省を中心としたところで親しまれている中国伝統演劇の一つです。美しい中国伝統音楽、繊細な所作、素早い立ち回りなど見どころ、聴きどころが随所にあります。川劇の最大の見どころは、一瞬にして顔につけた面を変える門外不出の秘伝の技“変面”で、今回も、十数回にわたり面を次々に変えて行く鮮やかな変面の妙技を披露します。

その他、豪快な火吹きなど、変面以外にもさまざまな演技術、瞬間芸が取り入れられており、多彩な川劇の魅力を味わうことができます。



### ■同時開催イベント「中国民間年画展」 - 民衆の夢と願い

鮮やかな色彩とユーモラスな絵柄で知られる中国の民間版画による年画 本展では、中国各地から集めた郷土色豊かな年画を焼く50点展示と年画刷りに使用される版木や用具を展示します。

2005年10月1日（土）～10月23日（日） 10：00～17：00（10月17日のみ21：00まで）

於：日中友好会館美術館 入場無料

◆年画の制作実演：中国の代表的な年画産地・朱仙鎮より当地随一の年画作家、姚敬堂と張廷旭による刷りと彫りの卓越した技を披露

**姚敬堂**：中国民間木版年画出版研究会副理事長、開封朱仙鎮木版年画研究会会長

**張廷旭**：開封朱仙鎮木版年画研究会副会長、河南省民間美術大師

9月30日（金）、10月1日（土）、3日（月）、4日（火）

於：日中友好会館美術館

### 【中国庶民の生活と年画】

中国には昔から春節（旧正月）になると、縁起のよい図柄を描いた「年画」という飾り絵を家の門や室内に貼る習慣があります。家の門には災いを打ち払い、福を招く「門神」や「獅頭」、そして、子宝を願う女性の部屋には「天仙送子」や「蓮生貴子」、長寿を願う老人の部屋には「松鶴延年」や「寿星」という具合です。その鮮やかな色彩と大胆な図柄からは、庶民の



←  
獅頭 36 x 50 cm  
邪気を払って福を呼ぶ  
福建省漳州 清代制作  
現代再版



→  
九十九消寒農曆圖 一部 4 x 35 cm  
河北省武強 清代制作 現代再版

全ての問合せと申込み：（財）日中友好会館 文化部 東京都文京区後楽 1-5-3

JP、有楽町線、南北線、東西線：「飯田橋」駅下車徒歩7分 大江戸線：「飯田橋」下車C3出口徒歩1分

Tel 03-3815-5085 HP：http://www.jcfc.or.jp